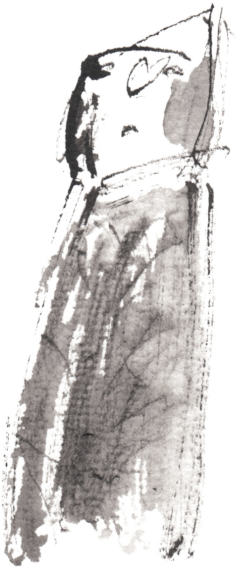
筆筆木筆で描く不思議のらかんたち

草画帖 32



号

枇杷の古葉。これを筆にします。
マン・レイの「Lips」という作品を思い出しました。

木星と土星あい寄る冬の暮

葉柄の節点が開いた馬の蹄型なので、こんなふうな線になる。

枇杷は大薬王樹と呼ばれるほどの薬効がある。

枇杷の花自愛貧しき二十年

雪虫が舞って……風花が舞って……やがて大雪に。

蕪村二景

化けさうな傘かす寺のしぐれ哉

傘は
化けた
傘さす
ひとに
夜半の
月と
しぐれ
ぶらと
世にふる
翁かな

蕪村二景

このむらの人は猿也冬木だち

ゆめから
さめて
村へでた
木立を
わたり
われも
さるなり
ひとの
寒さに
歯をむけば

森はみどりにわかわか笑い……小川のさざなみさらさら笑い……

——ウィリアム・ブレイク「笑いの歌」

さあ、おいで。みんなで楽しく歌おう、笑おう。
ハ、ハ、ヘ……フ、フ、ヒ……ホ、ホ、ハ……。
——ウィリアム・ブレイク「笑いの歌」

江戸時代に枇杷園と名乗った俳人がいた。本業は医者。

鳴海にてしぐれそめけり草鞋の緒　井上士朗

夕月の枇杷の花ほど香りをり

音楽の「楽」、白楽天の「楽」。
彼には「琵琶行」という名作がある。

草話

枇杷の花が咲いた。小さな苗から育って七年目。葉を重宝するので植えたものだが、もちろん花はうれしい。桃栗三年柿八年、枇杷は九年で生りかねる、または、枇杷は早くて十三年――などと聞くから花のことは頭になかった。葉はひどい肩凝りに利用したり、最近は筆になったり……枇杷の枝は太いので葉書には不向きで、あの大きな葉の方を使ってみたくなる。

＊

枇杷の名は、実が楽器の琵琶に似ていることから。古い経典に大薬王樹と称えられている木だが、琵琶の方も古くから楽を奏でてきた。唐の白楽天は「琵琶行」という長詩を残し、作中で琵琶を弾く落魄の女性を後世に伝えた。長安の元名妓に対して、逢坂の関に住む盲目の法師もまた琵琶の名手である。

余談だけれど、昔、「蝉丸」というパンク・バンドのベーシストとドラマーが詩の朗読で共演したいと訪ねてきたことがある。

＊

さて、枇杷の花がほのかに香り、夕べの空には木星・土星が睦まじい。この二惑星がこれほど接近するのは四百年ぶりと言う。北条石仏の造立の頃、太陽に近すぎて、らかんたちは観なかったのだろう。

南瓜水滴

俳句 白山鳥翁 ／ 絵 艸々子 ／ 詩 泉井小太郎

草画帖 第32号 2020年12月21日 泉井小太郎編集 六角文庫発行
〒675-2312 兵庫県加西市北条町北条1039　Tel 0790-42-6008